

果てしなき絶景～マティスの旅と作品への反映～その5 (モスクワ→ニース)

山本 雅晴

前回とは、時代はやや前後するが、ニース時代の前の1910年～14年のマティス作品の大作はシチューキンのコレクションが多い。1911年の秋にはシチューキンの招待でモスクワの邸宅を訪問し、「ダンス」や「音楽」などの注文作とそれまでのコレクション約37点をマティスのアドバイスで邸宅にマティス・ルームを造った。

マティスはモスクワを訪れた初めての近代洋画家として講演やシチューキンの知り合いの画家の指導もした。また、大聖堂なども見学レイコンの荘厳で偉大さを初めて知った。しかし、モスクワを題材としたマティスの絵画作品は見当たらない。



図1 「音楽」と「ダンス」1910、エルミタージュ美術館の近代西洋絵画展示棟、2020年頃のマティス展示室（2018年に鑑賞した時は対面させて展示していた）



図2 シチューキン邸のマティス・ルーム、1912年頃

1905～09年の米国人のスタイン兄妹、1908～14年のモスクワのシチューキン、モロゾフらの有力コレクターがいなくなった後、マティスはキュビズム志向・全盛の絵画界の中で自分の存在意義をいかにして確立していくのかという格闘が始まった。プリミティブへの関心・彫刻、室内画の展開、身体の創造、第一次世界大戦・家族の兵役、マティス流のキュビズムの試行・錯誤(1913～15)、画家とモデル→オダリスクの時代(1916～29)→ニース

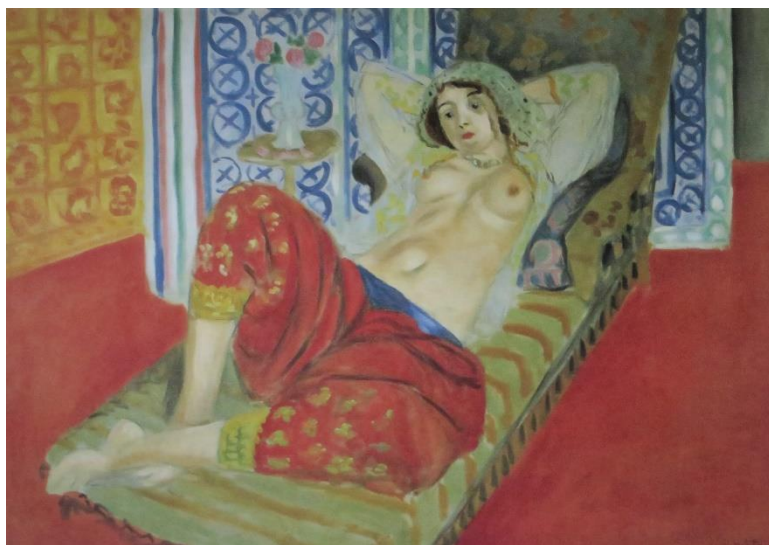


図3 赤いキュロットのオダリスク,1921,ポンピドーセンター（パリの美術館がはじめて購入したマティス作品）



図4 トルコの椅子にもたれるオダリスク,1928
パリ市立近代美術館（ルノワールに倣った舞台装置）

マティスは初期ニース時代への転換期、ルノワールへの関心を深めた。前述したように1917年末～1919年末のルノワールの死までアトリエを頻繁に訪れ、親交を深めた。偉大な先輩からじかにその真髓を学び取った。